
バカとまどか マギカと召喚獣

紅優也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとまどか マギカと召喚獣

【Nコード】

N6285Y

【作者名】

紅優也

【あらすじ】

バカテスとまどマギのクロスオーバー作品です。

明久のヒロインが『姫路』もしくは『美波』でなければ嫌と言う人はバックして下さい。

プロローグ（前書き）

始まりの夢

ブローグ

明久SIDE

気がついたら周りは廃墟だった。

「あ……………れ？何だこの夢？」

僕『吉井明久』は何が何だか解らなかった鉄人の補習地獄で疲労困憊で家に帰ってさっさと寝たのは覚えてるけど……

ゴゴゴゴゴゴ！！

「な、何だ！？」

僕は地面が揺れているのに気付く。

なんかりアリティーに富んだ夢だな……

ダギユン！ダギユン！ダギユン！

「銃声！？」

音に驚いて振り向くとそこには古いタイプの銃を構えメルヘンチックな服装をした金髪の女の子がいた。

「『ママ』……………」

え？

ギン！

「今度は剣の音！？」

上空に目を向けるとそこにはサーベルを構え少ばかり露出の多い水色の髪の子が剣を『何か』に振るっていた。

「『さやか』……」
え？え？

ズギャン！

「また！？さつきのは……槍？」
水色の髪の子の隣では赤い服を着ている赤色の髪の子が槍を振るっていた。

「『杏子』……」
何で……

「何で僕は彼女達の名前を知っているの！？」
僕はわけが解らなかったが取り敢えず大人しくしておくとし……ん？
あれは……

『……ねえ起きてよ……』
『！』
黒い髪の子が必死で桃色の髪の子を揺すっていた。
名前の方は全然聞こえないけど……

あれは……
「『ほむら』……？」
あれ？

やっぱりだ……どうして僕は黒髪の子の名前を知っているの？

『ほむら……』
『を守れなくてごめん。』
あれは……僕？

そこには純白の刀を持っていて純白の翼を持った藍色の鎧を着けた僕だった。

『明久……？』

『ふふふ、ごめん……そしてじゃあね。』

夢の中の僕は刀を構えて飛翔を開始する。

『明久！』

何で……！何で貴方はどの世界でもそんな悲しい結末を向かえるの！？

どうしていつもそんな悲しい決意をするのよおおおおおおおおおおおおお！』

光の流星となった僕は『何か』を切り裂きそして……

……

「アキ君起きなさい。

起きなければチュウします。」

夢の中からでも姉さんの驚異を感じた僕は夢から緊急帰還した。

畜生……！

夢の結末を見たかったのに！

「あれ？姉さん……家に宝石なんて合ったっけ？」

僕の机には純白の宝石が合った。

「？何を言っているのです最初からありましたよ？」

姉さんの言葉に僕は『あれ？』と思うけどそんなに気にせず時計を見て……

『午前8時20分』

「……………遅刻だあああああああああああああああああああああ
ああ！」

僕は慌ててカバンに今日の教科書をぶちこみ宝石を制服のポケット

にねじ込み塩と水を神速で飲み干し扉を蹴りあけて外に出る。

『……これ1時間も速いですね。』

そんな姉さんの台詞が合ったのを僕は知らない。

『バカとまどか マギカと召喚獣』

これは親友を破滅から救うために時を何度も繰り返した少女とちょっとバカだが大空のように全てに対して優しき少年の絆の物語。

プロローグ（後書き）

如何でしたか？

次回は明久がほむらと出会います。

第一話　少女と馬鹿の出会い（前書き）

明久がほむらと出会います。

第一話　少女と馬鹿の出会い

明久SIDE

「……………」

僕は通っている学校『文月学園』への道の途中にある電光掲示板の時計を見て歩みを止めた。

『午前7時30分』

「1時間も速かったじゃないか僕の馬鹿あああああああ！」
僕の絶叫が周囲に響き周囲を歩いていた人が『ギョット!?』となる。

「……………はあ。」

家に戻るのもあれだし取り敢えず歩くか。」

僕は歩き始めて……

ドン！

「おっと。」

失礼……………!?!」

僕にぶつかった少女を見て僕は絶句した。

「いえ。」

此方こそすいませんでした。」

流れる様な長い黒髪、能面の様な顔、そして頭に着けたカチューシヤ。

……………間違いない。

「ほむら……」

「え？」

「あ、いや何でもない！」

危ない危ない……つい呟いちゃった。

「すみません。」

『見滝原中学校』って何処ですか？」

見滝原中学校？

え〜と……

「口で言うより案内した方が速いね。」

案内するよ。」

僕はほむらの手を取ると歩き始めた……

『（須川会長に緊急連絡！

吉井が中学生の黒髪の美少女の手を掴んで何処かに行こうとしてい
る！異端審問会を収集しろ！）』

何故だ、悪寒がしてきた。

……

「と、まあ到着。」

……道順覚えた？」

「ええ、覚えたわ。」

僕の問いにほむらはこくりと頷いた。
良かった良かった。

あ、因みにため口なのは僕が許可したからだよ。

「あの……名前を覚えてくれない？」

ほむらが僕に名前を訪ねてくる。

「え？ああ、良いよ。僕は『吉井明久』。

この学校の近くの『文月学園』に通う二年生だよ。」

「え！？」

？何で驚いたんだろう……はっ！？殺気！

バツ！ズガガガガガガガガ！

僕が飛びさするとさっきまで僕がいた場所に多数の鎌が突き刺さる。

「『『異端者をぶち殺せ！！』』『』」

来たよFFF団が。

「く！まさか出張するだなんて……！さらばだ！」

僕は永眠を避けるために脱兎の如くその場から逃げ出した。

……

ほむらSIDE

ドン！

私『暁美ほむら』は体が誰かにぶつかったと思った瞬間再び戦いが始まると思った。

何故ならいつも『彼』にぶつかって見滝原中学校に案内されるところから始まるのだから。

「おっと。

失礼……！？」

私が前を見るとそこには何故か驚愕の表情を浮かべている彼……『

吉井明久』がいた。

「いえ。

此方こそすいませんでした。」

私は取り敢えず形式的な答えをしておく。

「ほむら……」

……え？

「え？」

「あ、いや何でもない！」

明久……何で私の名前を知っているの？

「すいません。」

見滝原中学校って何処ですか？」

私は何時も言っている事を明久に訪ねる。

まあ、明久の事だから……

「口で言うより案内した方が速いね。」

明久が私の手を掴んで歩き始める。

『（須川会長に緊急連絡！吉井が中学生の黒髪の美少女の手を掴んでと何処かに行こうとしている！異端審問会を収集しろ！）』
何故か小声でそんな声が聞こえてきたら明久が何故かガタガタ震えた。

……

「と、まあ到着。」

……道順覚えた？」

明久が私を見滝原中学校の前まで案内してき言う。
何時もの事ね。

「ええ、覚えたわ。」

私は頷きながら答える。

私は何時も通りに明久の名前を訪ねる。

「あの……名前を覚えてくれない？」

「え？ああ、良いよ。僕は『吉井明久』。

この学校の近くの『文月学園』に通う二年生だよ。」

「え！？」

文月学園！？

今までそんな高校は無かったうえにそもそも明久は高校生じゃなかった！

バツ！ズガガガガガガガガ！

私が驚愕していると明久がいきなり飛びさすりさつきまで明久がいた場所に多数の鎌が突き刺さる。

「『『『異端者をぶち殺せ！！！！』』』」

……何この軍隊擬き？

「く！まさか、出張するだなんて……！さらばだ！」

明久が脱兎の如くその場から逃げ出す。

……何が起きてるのか解らないけど明久に『まどか』私は今度こそ貴方達を救う。

まどかは破滅から……明久は悲しい決意から……絶対に救ってみせる！

続く

第一話く少女と馬鹿の出会いく（後書き）

如何でしたか？

次回は明久がキュウベえ、まどか、さやか、マミと出会います。

次回『逃走と化け物と戦いの始まり』

お楽しみに！

第二話　～逃走と化け物と戦いの始まり～（前書き）

明久がまどか達に出会います。

第二話　逃走と化け物と戦いの始まり

明久SIDE

『吉井は居たか!』

『いない! 全く何処に隠れやがった!』

はい、只今僕事『吉井明久』はFFF団の追撃から逃げ回っています。

因みに朝は校門に鉄人がいてFFF団がまとめて補習室に叩き込まれたから何とか逃げ切れた。

『見つけたら団員全員によるジャーマンスープレックスの後灯油を掛けて焼き討ちにしてやる!』

それは審問会じゃなくて只の死刑だよ?

「く、このままでは永眠してしまう……!」

あの夢の結末を知るまでは死ねない!

「と、言う訳で逃げよう。」

僕は隠れていたみかん箱から抜け出し周囲を見回して誰もいないのを確認するとキョロキョロと辺りを見渡しながら路地裏に逃げ込む。

「ふう……助かった……」

僕が一息吐くと……

ダン!

銃声。

「え!? な、何だ!？」

僕は居ても立つてもいらねずに走りだした。

.....

僕が銃声のしている場所に着いたら.....

ほむらが変なコスプレをしていて白い生物に拳銃を向けていた。

「ち、ちよつと！？何やってるのさ！」

僕は慌ててほむらと生物の間に入り楯になる。

「え！？（そんな馬鹿な！？明久は確かにキュウベえと出会っけどこんな形じゃ無かった！しかも何でこの路地裏に入るの！？）」
ほむらが驚愕した隙に僕は生物をカバンの中に叩き込む。

「さらば.....」ダギョーン！

逃げようとした僕の足下に銃弾がめり込む。
だ、大丈夫だよね！
当てたりなんて.....

「次は耳の付近を狙うわ。撃たれなくなればそいつをカバンから出さない。」

撃つ気満々のようだ。

「心の底からすいませんでした！」

僕は即座に土下座をしてカバンから生物を出す。

『酷いよ！』

生物が何か喋るけど無視する。
命より替えがたいものは無い！

「ええ！？何この状況！？」

「ちょっと何であの転校生銃を持つてんの!？」

声が聞こえてほむらがそちに注意を向けた瞬間を狙い僕は生物を声の方向にぶん投げ僕もその方向に走りだす。

「あ!？」

「逃げるよ!」

ほむらが動揺している隙に僕は無我夢中で二人の手を掴み走りだす。ペース配分なんて知るか!

.....

「ぜえ……ひい……ぜえ……ひい。」

ともすればほむらに後ろから撃たれるのでは無いかという恐怖から全速力で走りだした僕等だったが取り敢えず逃げ切ったと考え屁たれ込む。

やれやれ……助かった……

『やれやれ……いきなり銃で撃たれるわ、カバンに詰め込まれるわ、見捨てられるわ、ぶん投げられるわで散々だったなあ……』

さっきまで桃色の髪の女の子(ん?桃色の髪?)に抱き抱えられていた生物がぬけぬけとそんな事を言う。

「つか……何であたし達まで巻き込まれるわけ……?」

と、桃色の髪の女の子の隣で息を吐いていた水色の髪の女の子が僕を睨みながらさういう。

あれ?水色の髪?

「……『さやか』だ。」

「?何であたしの名前を知ってるの?」

「は!?!いや何でもない!知り合いに君みたいな名前前で君みたいな

髪の女の子がいるだけだから！」

僕は慌ててその言葉を打ち消す。

やれやれ……名前を知っているって楽じゃないなあ……

「ふーん……ま、良いわ。そう言えばあんた誰？」

あ……僕の名前か。

「僕は吉井明久。

文月学園に通う高校二年生だよ。」

『……』

さっきから生物が僕のポケットに入っている宝石を見ているけどどうしたんだろうか？

「ええ！？」

「私達より歳上何ですか！？」

僕って一体……

「と、紹介し忘れてました「敬語は良いよ。」そうなんだ。

あたしの名前は『美樹さやか』宜しく願いしますね吉井先輩。」

と、さやか。

「私は『鹿目まどか』です。

宜しく願いします。」

と、桃色の髪の子。

「で？君は？」

僕は生物の名前を尋ねる。

『僕かい？僕は『キュウベえ』。』

宜しくね。』

そうか変な名前だ。

「……………あれ？」

此処は……………何処？」

確か僕等は必死に逃げ回って路地裏のどこかにいた筈だがそれが一体全体……………

「何だこの空間？」

薔薇の香りが漂う妙な空間にいた。

「よ、吉井先輩……………？」

鹿目さんが震えながら心配そうに僕を見る。

「大丈夫、頼りないかもしれないけど二人は逃がすから。」

僕は安心させるための言葉を言いつつ無意識の内に白い宝石をポケットから出し手に持つ。

うん、何でか確りと手に馴染む。

「……………！？危ない！」

ドン！と僕はさやかを押して……………

ザク……………！

お腹を斬られた。

「あ……………！が……………！」

「！？よ、吉井先輩！？」

悲鳴を上げるさやかを尻目に僕は冷静に周囲を見る。

そこには人間の下半身に蝶を無理矢理接続しごちゃ混ぜにしたような生命体が鋏を持って飛行している上に僕等を取り囲んでいた。

「ぐ……！」

僕は何とか立ち上がりカバンから『改造エアガン』と『改造スタンガン』を出し構える。

役に立たないかもしれないけど無いよりは増しだ。

そう思った矢先に……

ガシ！

「な！？」

僕は何時の間にか忍び寄ってきた茨にぐるぐる巻きにされてしまう。

ギシギシ！

「が……あ……！」

凄い力だ……！

骨が軋む……！

「吉井先輩！」

鹿目さんが悲鳴を上げる。

不味い意識が……

ダギユン！

途切れる前に銃声と共に茨が撃ち抜かれ僕は墜落した。

ドテン！

「あいたあ！？」

痛い！

お腹の傷……あれ？

治ってる。

「大丈夫ですか？」

疑問を感じている僕に金髪の少女が僕の安否を尋ねる。

！？マミ……

「あ、うん。大丈夫。」

取り敢えず名前を知っている事を悟られないように答える。

「取り敢えず自己紹介の前に……」

マミが歴戦の戦士の様な笑みを見せながら……

「軽く一仕事しちやおうかしら？」

マミが彼女も持っている宝石『ソウルジェム』（何で宝石の名前を僕は知ってるんだ？）を天に掲げ『変身』する。

そして変身のエネルギーの余波で化け物『使い魔』（……何で化け物の名前まで知ってるんだ？）の群れは舞い上がって一ヶ所に密集し……

「『ティロ・ステルミニオ』！」

マミが召喚した無数のマスコット銃の銃口から撃ちだされた無数のレーザーが使い魔の群れを飲み込み一瞬で跡形も無く消し去った。

「……………」

鹿目さんとさやかはあんぐりと口を開けていた。

そりゃそうだあんだけいた使い魔を瞬殺したんだから。

使い魔が消えたら空間（どうやら『魔女』は逃げたらしい）が元の薄暗い路地裏に戻り……

「『『吉井を殺せ！……！』』」

FFF団登場。

「くっそおおおおおおお！逃げるよ！」

「え？え？え？」

「な、何ですかあの人達？」

「何故ですか？」

皆が頭に？の字を浮かべるけど……

『おのれ、吉井！とうとう中学生にまでフラグを立てるか！』

『あの三人を俺達で保護してやろう！』

『そして俺達で正しい方向に育てよう！』

「吉井先輩、逃げましょう！」

全力で全速力で！」

「ひ！？」

「に、逃げましょう！」

『何なんだい彼等は！？』

FFF団の台詞にヤバイ空気を感じたらしい三人と一匹が様々な悲鳴を上げる。

僕は恐怖で足が竦んだらしい鹿目さんの手を握り路地裏から疾風の如く逃げだした。

続く

第二話　逃走と化け物と戦いの始まり　（後書き）

如何でしたか？

次回は明久が『魔法少女』の存在を知ります。

次回『魔法少女と契約と存在しない契約者』

お楽しみに！

第三話　魔法少女と契約と存在しない契約者（前書き）

明久が魔法少女とその役目について知ります

第三話　魔法少女と契約と存在しない契約者

明久SIDE

何とかFFF団から逃げ切った僕等は只今マミの家に向かっているところだ。

え？

どうやって逃げ切ったかって？

鹿目さんが『警察官』というナイスな人達を呼んでくれたお陰でFFF団は今頃『怪しい宗教団体』として追い掛け回されていると云うのが答えだよ。

「吉井先輩って凄い人達に追い掛け回されているんですね。」
と、鹿目さん。

「いや、何時もじゃないよ。」

あいつらが嫉妬に狂った時だけ。」

てか僕もやる側だしね（主に雄二）。

「……それろくな嫉妬に狂って無いわね絶対。」
と、マミ。

「うん。」

たかが女の子に親しく話しているとか『キス』されただけとかだよ。」

「それは……確かに嫉妬に狂うと思うけど殺す程じゃないと思う。」
と、さやか。
だよな。

「ん？」

……僕の住んでるマンションに住んでたの！？」

見馴れている建物に僕は驚愕したまさかご近所だったとは……

「あら、アキ君にマミちゃん。」

……最強《最凶》の危険人物が……『マミちゃん』！？

「あ、今日は玲さん。」

と、丁寧にマミが頭を下げる。

これは一体全体どういう事だ！？

姉さんとマミが知り合いだなんて！

「ああ、時々買い物とかで見掛けるので帰るまで一緒に話しているんです。」

「マミちゃんは凄いですよこの年で一人暮らしなんですから。」

……アキ君と違って健康的な暮らしですし。」

否定出来ないのが辛い……（因みにバカテスは原作『第五巻』の辺りを参考にしております。）

「え？吉井先輩って健康的な生活をしてないんですか？」

と、マミ。

うーん……

「はい、私が来るまでは塩と砂糖と水が主食でした。」

何で姉さんが知ってるの！？

「し、塩と砂糖と水って……」

「た、確かにその三つがあればある程度生きられますけど……」

……」

「よ、吉井先輩、良く生きてましたね……」
うつうつ……年下の女の子に心配されるって……

「じゃあ、マミちゃんが毎日アキ君にご飯を作ってくれませんか？」
と、姉さん。

……あれ？

「姉さん、確か『不純性交友全面禁止』じゃなかったっけ？
ご飯を作ってもらうのって完全に不純性交友に該当するんじゃない？」
「はい。」

確かにそうですが私はアメリカに戻らなければならない用事が出来たのでアキ君がまた健康でない生活をするかもしれないのでそれに備えてのお約束です。」

麗しき家族愛に涙が止まらない。

そうか僕ってそこまで信用されてないのか……

「……て、え？

姉さんアメリカに戻るの？」

「はい。」

明日の午前中にはアメリカに戻ります。」

姉さんがこくりと頷く。

「じゃあ、今日の夜ご飯はパエリアで良いよね？」

「はい。」

あ、マミちゃんの家に行くのならばご迷惑にならないように。」

そう言って姉さんはマンションに入っていくやれやれ……淋しくなるなあ……

……

「で、巴先輩。

あれは何ですか？」

あれからマミの家に入った僕等はマミの紅茶（美味しかった）を飲んだ後さやかがマミの『あの姿』について尋ねる。
だよね。

いきなり人がメルヘンチックな服装に変身して銃やら魔法やらを使っただけだから疑問に感じるのは当然だ。

『ああ、あれは『魔法少女』っていう姿なんだ。』

キュウベえがマミの代わりに答える。

そう言えば何時も（あれ？『何時も』？何を言ってるんだ僕は？）
キュウベえが『魔法少女』や『魔女』について説明してるっけ。

『叶えたい願いを言っ僕と契約すれば魔法少女になれるんだ。
但しやらなくちゃいけない事もあるけどね。』

「……さっきの奴等？」

僕はキュウベえの言葉に質問する。

分かり切ってるけど……

「ええ、そうよ。

私達は『魔女』と呼ばれる『絶望』を糧にするものと戦うの。
それから美樹さん、鹿目さん。私の事は『マミ』で良いわ。」
マミがキュウベえの代わりに答える。

「あ、はい。

マミさんそう言えば私達を襲ってきたのは何ですか？」

鹿目さんの質問に僕は疑問を感じ始める。

「……魔女って名だから『使い魔』とかそういう名前じゃないかな？」

『うーん……何処かで解るかもしれないから今は放っておこう。
『まどか』にさやか、僕と契約して魔法少女になって欲しいんだ。』
と、キュウベえが二人に尋ねる（……『まどか』？何でこの名前に
引っ掛かりを覚えるんだ？）。

「て、ちよつと待った！

いきなり二人に答えを求めるのはダメだよ！

魔法少女になるって事は魔女と命懸けの戦いを強いられるって事で
しょー！？

死んじやったらどうする気さー！」

よくよく考えたら信じられない事を言っただけで僕は慌てて
突っ込みを入れる。

『む……』

「確かに吉井先輩の言う通りね。

……ねえ、美樹さんに鹿目さん、『魔法少女』の仕事を知るために
私の『魔女退治』を見学してみない？

それからでも遅くはないわ。」

マミの言葉に二人が頷く。

ほ……良かった良かった。

「ま、今日は解散ね。

明日放課後に皆で行きましょう。」

マミの言葉で本日は解散となった。

……明日の授業どうしよう。

続く

第三話　魔法少女と契約と存在しない契約者（後書き）

如何でしたか？

次回は明久が『魔法少年』に変身します。

次回『放課後と初変身と有り得ぬ事態』

お楽しみに！

第四話　放課後と初変身と有り得ぬ事態　（前書き）

明久が初変身します。
無双です。

第四話　放課後と初変身と有り得ぬ事態

明久SIDE

「此れより異端者吉井明久の審問会を開始する。」

此れが僕が教室に入って一番に言われた事だ。

畜生……！

やっぱり捕まらなかったか……！

「横溝一等審問官。

被告の罪状を読み上げたまえ。」

『はい、須川会長。

えゝ異端者吉井は昨日の放課後に中学生の美少女三人にフラグを立て更に愛の逃避行を繰り広げ……』

「御託は良い。本音を言いたまえ。」

『中学生の美少女にフラグを立てたのが羨ましかったであります！』

「宜しい。

さて……吉井、何か言い残す事があるか？」

「待った！

何で刑を言い渡す前の台詞が出て来るの！？

審問会の行程を色々すっ飛ばしてるよ！？」

やっぱりこの審問会は色々凄いと思う。

「判決死刑……「ちょっと待って下さい。」」

やった！

誰だか知らないけど助けてくれてありがとう！

君は天使……

「明久君。

中学生の美少女三人ってどういう事ですか？（ゴゴゴゴゴゴゴゴ！
！！）」

「ひい！？」「姫路さん！？」

そこには桃色の髪に小柄な体に不似合いな胸部を持つクラスメイト『姫路瑞樹』がどす黒い殺気を出しながら立っていた。

どうやら僕に与えられたのは天使では無く僕を地獄に導く死神だったらしい。

「ひ、姫路さん……私達は今すぐこの異端者を始末するので、ご容赦を……」

そんな事をびびりながら言う須川君、よく見ると周囲のFFF団全員の足が震えていた。

君達は良いよね今すぐ逃げ出す事も出来るんだから。

「さあ……明久君……！」

私とじっくりはつきり話し合いました……「ほほう、先生としては吉井以外の奴等とじっくりはつきりと話し合いたいんだがな。」

慌てて姫路さんが振り向くとそこには現代の筋骨隆々の鬼「鉄人」こと『西村宗一』先生が立っていた。

「て、撤収うううううううううううう！」

「に、西村先生これは……」

「問答無用だ馬鹿共！」

ちようど良い新しい『補習』を考えたからその『実験台』が欲しかったところだお前達を実験台にしてやるから覚悟しておけ。」

たちまちの内に逃げようとしたFFF団と姫路さんが鉄人に捕縛され補習室に連行されて行った。

鉄人、生徒を『実験台』呼ばわりは無いよ……

僕は連行されていった皆に合掌をしつつこう思った。

……

「『吉井、保健室に行つてきなさい。』」

鉄人を含む教師陣に六時限目が終わるまでこれを言われた回数は軽く二十回を超えていたような気がする。

何故だ……何故今日の放課後の『魔女退治』の見学に行くために補習を受けないという目標を達成するために真面目に勉強しているが為にこんなことを言われなきゃならないんだ？

「明久、今日のお前何か変だぞ？」

「いや、多分『霧島』さんに受けたであろう折檻の痕跡があるままに登校してきた『雄二』の方がちよつと変なような気がするよ？」
僕は悪友であり親友である『坂本雄二』の顔がぼろぼろになり更に足を引きずっているのを見て突っ込みを決める。

「ぐ……！」

「しゃあねえだろうが！あいつはいきなり寝込みを……昨日一緒に帰ってくれなかった。」って言いながら襲い掛かつてきて着替える時間を残すくらいまで制裁を加えて来たんだぞ！？」

……霧島さん……君は何処まで雄二を縛る気なんだい？

僕はこの学年の主席に戦慄を覚えた。

……最も雄二には同情しないけど。

「じゃ僕は帰るから。」

「一体どうしたのじゃ明久？」

授業は真面目に受けておつたし昼食は……まあお主の姉君がおるか
らまあ何時もの事としてじゃ。

お主が真面目に勉強するのは特別な時だけだと思つていたがのう？」
と、爺むさい言葉を言うのは見た目は完全な美少女の『木下秀吉』だ。

そろそろ『女子の制服が届く』というのが専らの噂だけどそれは無いと思う。

何故なら秀吉には……

「ヒデ……」。

一緒に帰る……。」「

立派な彼女がいるからね。

因みに彼女の名は『藤風凜』。

最近コスプレをして路地裏等で見掛けられているという噂があるけどまさか彼女まで魔法少女なんて事は無いよね？

「む？おお凜。

解ったのじゃよ……。」「

相変わらず惚気たっぷりだなあ……

僕は二人をくつつけた為に苦笑しながらその光景を見ていた。

………

「遅いですよ吉井先輩！」「

それが僕が集合場所である『見滝原中学校』の校門に来て最初にさやかから言われた事だった。

「ごめん、ごめん。

皆がしつこくてさあ。」「

あの後クラスメイトである『島田美波』と姫路さんがしつこく問い詰めてきて逃走したら追ってきたので振り切るのに時間が掛かったのだ。

「まあまあ、さやかちゃん落ち着いて。」「

「そうよ美樹さん、吉井先輩にも事情があるんだから。」「

そっいつてまどかとマミがさやかを落ち着かせる。

「さてと……行きましょう。」

僕等は前の魔女の出現場所へと歩きだしていった。

『？ヒデ、あれ吉井君達じゃ？』

『む？確かに明久達じゃのう……お主と同じで『あの力』を持っている者はおるのか？』

『うん、金髪の子。』

『そうか、つけるぞ。』

『うん。』

そんな会話が後ろでされたのを僕達は知らない。

……

魔女探しは至って簡単『足で探す』だ。

最もソウルジエムをリーダー代わりにして魔女の残り香とも言つベき『魔力』を辿りながらだから警察よりは増しだけど。

「そう言えば魔女ってどんな所に現われるんですか？」

と、まどかがマミに質問する。

確かにそうだ（記憶では『病院』、『廃墟』、『路地裏』等が映るけど）。

「ええ、魔女が現れやすいのは喧嘩や騒ぎが起こりやすい場所、自殺等に適した廃墟や路地裏、例は少ないけど病院に現れた時は最悪よ。」

マミの言葉にさやかは『病院……』と言いながら持っているバットをギュット握る。

「『上條恭介』君の事が心配なの？」

「！？？何でその事を！？」

しまった、また言っちゃった。

「ごめん、ごめん。
独り言だよ。」

全く……記憶はさやか幼なじみの名前まで知っているから厄介だ。

「？あのマンション……」

元は高級マンションであつただろう廃マンションの屋上に人が……
え？

「……危なああああい！」

慌てて僕は飛び降り自殺をしようとする人の元に走りだす。

よし！

間に合う……

ゲシ！

「へぶ！？」

僕は変身したマミに踏まれ地面と豪快にキスする。

「うつつ………」

「あの……大丈夫でした？」

まどかが僕を心配して駆け寄ってくる。

うつつ……優しいなあ。

「うん、大丈夫。」

それよりその人は！？」

慌ててマミが抱えている人の元に駆け寄り安否を確認する。

うん、気絶していて首筋に魔女に魅入られた証である『魔女の口付

け』がある事を除けば大丈夫だ。

「あの……何ですかこれ？」

さやかが魔女の口付けを見つけ尋ねる。

「……魔女の口付け、魔女に魅入られた証よ。」

マミが薔薇の形の口付けをそつと撫でながら呟く。

薔薇の形……『薔薇の魔女ゲルトルト』だね。

僕は自分の持つてる知識に驚きながらも考える。

「……行きましょう。」

マミが立ち上がりマンションを見据えてマンションに入ってしまった。

……………

「！吉井先輩、上です！」

「解った！試験召喚！^{サモン}」

僕は現在マミ達と共に結界を突き進んでいた。

え？何で召喚獣を召喚出来るかって？

何でか結界に入った瞬間使えるようになったんだよね。

唯学園で召喚するのと違う所は

『点数が表示されない』

『総合科目の点数並みの力を持っている』

『召喚フィールドが必要無い』の三つかな？

悲惨なのは使い魔達だよ。

片っ端からマミに射程範囲に入る前に撃たれるわよしんば近寄ったとしても僕の召喚獣の的確な一撃とさやかが滅多やたらと振り回すバットの餌食になるわけで敵の僕が同情するくらい悲惨なんだから。

「と、着いたみたいだね。」

僕等の目の前にはいかにも『此処に居ますよ』と言わんばかりのデカイ扉が合った。

「さあ、入るわよ。」

マミが躊躇せずに扉を押し開ける。

その瞬間僕等の目の前には見事な薔薇園が広がった。

そしてその中央には使い魔と同じ蝶の羽、足と思わしき触手、グロテスクなマールブル色の胴体……『薔薇の魔女ゲルトルト』だ。
ゲルトルトの『本質』は『疑惑』。

奴の薔薇園に入るものは全て敵認識という困った性格だ。

そして……

「！？う……！」

うわ……うわあああああああああああ！？」

僕の頭に何かが入り込んでくる感覚が起こり僕は倒れこむ。

な、何だよこれ！？

何だよこの記憶！？

「！？よ、吉井先輩しつかり！」

「ちよつとどうしたのよ！？」

まどかとさやかが悲鳴を上げたけど僕の意識はマミが僕等を護るためにバリアを張るところで途絶えた。

………

僕は何故か五枚の『絵』がある部屋に立っていた。

「………此処は何処だ？」

僕は周囲を見渡し絵しかないので確認すると手近にある絵を見る。

そこには……

「……まどかと僕？」

最初の絵はまどかが魔法少女になっており手に弓を持っており僕は純白の弓を持っていて背中合わせで立っている絵だった。

「こっちは……さやかと僕か。」

その隣の絵はさやかがサーベルを持っており僕は純白のサーベルを持っていてそれを交差させている絵だった。

「その隣は……マミと僕か。」

更に隣の絵にはマミがマスコット銃を持っており僕は純白のマスコット銃を持って互いの手を握り締めて二丁のマスコット銃と一緒に撃とうとしている絵だった。

「更に隣は……杏子と僕だね。」

その次の絵は槍を構えている杏子と純白の槍を構えていて杏子の槍と交差させている僕の絵だった。

「最後は……ほむらと僕か。」

最後の絵は漆黒の楯を構えているほむらと純白の楯を構えている僕が背中合わせで立っている絵だった。

ガチャン！

何かが落ちる音に僕は振り替える。

そこにあったのは……

「刀……」

夢で見た純白の刀だった。

その刀は神々しくて綺麗で持っただけで消えてしまいそうな刀だった。

たけど僕は迷わずそれを手に取る。

「頑張ろうね。」

『全てを断ち切り定められし運命を切り裂く刀^{アキヒサ}』。
僕は刀の銘を言いその空間から出た。

……………

目が覚めた時にはマミは危険な状況だった。

四方から使い魔が迫り更にゲルトルトの触手も振るわれる為に攻撃が出来ない状況だった。

「さてと……やりますかあ！」

僕はソウルジエムを掲げ光に包まれる。

「！？吉井先輩！」

「あんたも変身すんの！？」

まどかとさやかが驚くけど無視する。

そして僕の体に藍色の鎧が付けられ純白の刀を持つと光が晴れ二人が驚いた表情になる。

「……ごめんね。」

僕は刀を振るってバリアを両断する。

「あ~~~~~！！？」

何やってんのよこのバット高かったのに！」

やっぱりバットが触媒になっていたのか……

僕は罪悪感に苛まれながら『刀』を『マスケット銃』に『変化』させ使い魔と触手を片っ端から撃ち抜く。

「!？吉井先輩!？」

マミがびっくりしているけど無視し僕は『マスケツト銃』を『槍』に『変化』させ『多節棍モード』にするとそのままゲルトルートに叩きつけぐるぐる巻きにする。

そして……

「その疑惑も……お前が振り舞いた絶望も……僕が全て……断ち切る!」

僕は『槍』を『刀』に戻しそのままゲルトルートに向けて走りだす。

「『ティロ・リペイション』!」

僕が刀を居合い抜きでゲルトルートを両断しその中から出て来た少女『黒崎花梨』を抱き抱えマミ達を振り返る。

うん。全員『ポカーン』だね。

「ん？」

あれは……『ほむら』？」

黒髪の少女を確認したが直ぐに帰ってしまった。

……

ほむらSIDE

「有り得ない……」

私は精一杯の思いを込めて呟く。

どうして……何故……

「『魔女』が『魔法少女』に戻ったの？」

本来『グリーンフシード』化した『ソウルジェム』は戻らない。

しかし明久の魔法『ティロ・リペイション』が炸裂した瞬間グリーンフシードが消え去り穢れが一切無い無垢のソウルジェムが残った。

更に私や巴マミのソウルジェムも一切の穢れが無くなった。

有り得ない有り得ない有り得ない！

「明久……この世界の貴男は一体何者なの？」

私は多くの疑問を残した戦いを反芻しながら歩いていった。

続く

第四話　放課後と初変身と有り得ぬ事態（後書き）

如何でしたか？

次回はオリキャラが文月学園に転校してきます。

次回『転校と逃走と思い』

お楽しみに！

第五話　↳ 転校と逃走と思い　↳ (前書き)

オリキャラが転校してきます

第五話　転校と逃走と思い

明久SIDE

僕は頭を『バカン!』と殴られ目を覚ました。

「痛あ!?! 誰だよ!?!」

振り向くとそこには……目を本気で怒らせているマミと花梨の姿があった。

「吉井先輩……?」

ゲームをやったままの格好でに寝ていたって事は徹夜でゲームをやっていたって事ですよね?」
と、マミ。

「ちゃんと寝ないとダメですよ!

睡眠は脳を休ませる事ですし睡眠不足は体の疲れとかを残すからいざ魔女退治で死ぬかもしれない状況で寝不足は最悪です!」
と、花梨。

うつうつ……なんか情けない。

因みに何で花梨が入るかっていうと花梨は身寄りが居なくて半分自暴自棄で魔法少女になったらしい。
んで身寄りが居ないなら僕の家の居候にしようって事で満場一致で可決されたから僕の家に住んでいる。

「吉井先輩、聞いてるんですか?」

「え!?! あ、うん。聞いてるよ!」

考え事をしている為にマミの言葉に答えるのにちょっと遅れる。

「もう……じゃあ直ぐに朝食の準備をしますから待っていてくださいね。」

マミが台所に向かっていき僕は漸く説教から解放される。

「ふう……朝から説教って……」

「吉井君が悪いんだよ？」

「うーん……ねえ、花梨。『吉井君』じゃなくて普通に『明久』って呼んで欲しいんだけど……」

「ほえ？」

「何か『吉井君』って他人行儀じゃん同い年だし一緒に住んでるんだからもう少しフレンドリーになってくれないかなーって思ってる」

それを言うと花梨はうーんと唸り……

「解ったよ。」

宜しくね明久。」

と、言ってくれた。

「あ、そうだ。」

私今日から『文月学園』の生徒だから。」

……は！？

「ち、ちよつと待って花梨！

どついう事それ！？」

「え？やっぱり居候のままつてもなんだしもう一回高校生をやるって云うのも楽しいじゃん。

だからだよ」

花梨が悪戯が成功した子供の様な表情になる。

不味いぞ……！

学費はまだ良いとして花梨みたいな極上の美少女と登校なんてしたらFFF団は最速で嫉妬に駆られて僕を狩りにくるに決まっている。どうすればいいんだ……！

「吉井先輩、朝ご飯が出来ましたよ。」

考えていたらマミがやってきた。

ま、いつか。

皆も昨日の事があつたなら懲りてるだろうしね。

しかし僕はその考えが甘かった事を痛感する事になる。

………

「ふっふふーん」

僕の隣で文月学園の女子の制服を着た花梨が鼻歌を歌っている。

「花梨、そんなに嬉しいの？」

「うん、前の学校では怪我が何もしていないのに治ったから『化け物』扱いされて中退したんだ。」

花梨が淋しそうな表情で自分の深緑色のソウルジェムを揺らす。

「む、酷いね。」

唯端に何もしないで治っただけで化け物扱いだなんて。」

最低な奴等の代表だね。

「いや、それは明久みたいに私の『仲間』とか『そんなの気にしない』っていう人みたいな一部の人間だけだもの。」

花梨が僕の言葉に突っ込みを決める。

「あ、そくだよね……」

「うん。（ありがとう明久……）」
と、そうこうしている内に校門の前に着いて……殺気！

「『『異端者発見！！！！』』』」

「ちいいいいいい！！」

見つかった！」

「ふえ！？あ、明久！？

何でいきなり私の手を握るの！？」

花梨が慌ててるけど僕は無視するなんせ……

『おのれ吉井！

誰だその美少女は！？』

『そんな美少女と登校など認めん！』

『逃すな殺せ！』

『ぶち殺すぶち殺すぶち殺すぶち殺すぶち殺す……』

『妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい……』

……』

あの集団に八つ裂きにされるか否かの瀬戸際なんだからね。

「あ、明久！？

何あの覆面集団！？」

「黙って着いてきてくれ！」

僕は花梨の手を握ったまま職員室に向けて駆け抜けるペース配分なんて知ったこっちゃ無い！

……

何とか逃げ切った僕は花梨を鉄人に預けて教室にやってきて……

「『『『クロス。』』』」

開いた扉を直ぐに閉め職員室に向かって再び歩きだした。

うん！

さっきのは幻覚だ！

そうでなければ錯覚だ！

ガシ！ボキイ！

「ふぬおおおおお！？僕の腕の関節が真逆に曲がって新人類にいいいいいいいい！！？」

僕は慌てて振り向き……

「アキ……須川達の言っていた麗しき美少女って誰かしら？」

「明久君、お話をしましょうね？」

ゲルトルトなんて裸足で逃げ出しそんな殺気を出しているペッタ
ンコとポニーテールが特徴の『島田美波』と姫路さんがいた。

うん。死んだな。

「さあ……話し合いをしましょう？」

「あはは……美波、やだなあ。」

話し合いをするなら何で僕の腕をがんにがらめに縛る必要があるんだい？

「うふふ……明久君、紐無しバンジーでもしましょうか？」

「え？二人ともちよつと待って！？」

それ僕を屋上から突き落とすって事だよね！？

お願い！誰か……助け……」

「何をしている姫路に島田。」

鉄人^{かみ}が現れた。

「に、西村先生！？」

「私にはお前達が吉井を無理やり連れていこうとするように見えるのは気のせいかな？」

「静かにしろ馬鹿共！
では自己紹介を頼む。」

「あ、はい！」

え……私の名前は『黒埼花梨』って言います。今日から宜しくお願いします！」

花梨が頭を丁寧に下げ、僕の横のちやぶ台にやってくる。

あれ？

「吉井クロス。」「ヤバイ展開になってきた。」

「それから黒埼は身寄りが居ないそうで吉井の家に居候になっているそうだ。」

死んだあああああああああああああ！

[illegible]

「明久君？」

「ちょっとお話をしましょっか？」

⌈
<
!
?

このまま僕だけ死んでたまるかあああああ！皆！雄二と秀吉は雄二は霧島さんに秀吉は藤風さんにベタベタするのが好きなんだ！」

「な！？」

何て事言ってんだてめえ!？」

「て、照れるのじゃが寄りにもよつてこ奴等に言うかの普通!？」

「序でに木下と坂本もぶち殺す！」

「ちくしょおおおおおおおおお！」

「はあ……自分の気持ちが通じないって辛いな〜」。
私は多分魔法少女になって初めて最後の恋に前途多難の風を感じた。

続く

第五話　転校と逃走と思い　（後書き）

如何でしたか？

因みに明久はまどマギの主要メンバー全員とオリキャラが数名をハ
ーレムにします。

第六話　透明と赤の魔法少女と秀吉（前書き）

オリキャラが活躍します。

杏子が登場します。

オリジナルの魔女が出ます。

第六話　透明と赤の魔法少女と秀吉

凜SIDE

「ヒデ……」。

一緒に帰る……。」

私『藤風凜』は私が不死身でそして下手をすれば化け物《魔女》になると解つていても私を好きになつてくれた最愛の人『木下秀吉（愛称ヒデ）』の入るクラス『二年Fクラス』に来ていた。

「凜……寂しかったのじゃ……。」

「私もだよ……。」

因みに私の身長は『158』？という低身長のロリコン体型だから良く中学生に最悪小学生に間違われるんだ。

『『『ぐふ！』『』』

あれ？

何で周囲のEクラスの生徒が砂糖を吹いて気絶するの？

「お前等……仲が良いのは結構な事だが甘々過ぎるぞ。見てるこっちが恥ずかしいくらいだ。」

と、言うのはヒデのクラスの代表で何を間違えたか私のクラスの代表『霧島翔子』の思い人である上にヒデに女装（まあ可愛かったから良いとして）はさせるわ覗きに巻き込む（しかもこれでヒデは一週間の停学をくらい私は凄く寂しかった）わの最低の変態赤毛（これも私が嫌いな一因だ『杏ちゃん』と同じ色じゃなくて良いのに）ゴリラ『坂本雄二』だ。

「おい、待て！

俺、地の文で酷い事言われて無いか!？」
む、読心術ですか。
最低ですね。

「地の文で貶すお前の方が最低だボケ！」
「うえ~~~~ん！」

『ボケ』とか『最低』とか言われた~~~~！」
「嘘泣きは……げ!? 待てお前等! 落ち着……」「『』」「問答無用!」
『』」「ギヤアああああああああああ!？」

あつという間に赤毛ゴリラはぼろ雑巾にジョブチェンしました。

「馬鹿ですね……私がそんなに簡単に泣くと思うのでしょうか？」

「雄二……哀れな……」

「雄二、グッドラック！」

そして秀吉に藤風さん今日も良い仲で！」

「わわわ!？」

明久そんなに引つ張らないで！」

その隣を私とヒデをくつつける為にデートコースやら告白の場所やらを見付けてくれた大恩人『吉井明久』君が転校生（そして元魔女）の『黒崎花梨』の手を握って隣を駆け抜けます。

まあその後ろに……

「アキ待ちなさい！」

黒崎との関係を話しなさい！」

「明久君~~~~？」

二度と女の子に手を出せないようにしましょうね~~~~？」
アマゾネスが二人も入るんじゃそりゃ逃げますよね。

「はあ……『起動』じゃ。」「
アウエイクウエイン

「『試^{サモン}獣召喚』。」

召喚フィールドが形成され召喚獣が出されたにも関わらず吉井君に集中している二人が気付く筈もなく……

「敵前逃亡は補習！」

「「キヤアあああああああ！？」」

あつという間に西村先生に連行されました。

「あ、そういえば今日は杏ちゃんに差し入れの日でした。」

「む、そういえばそうじゃな。」

「買い物しましょうか。」

「そうじゃな……。」

私達はそんな事を言いながらFクラスの教室から離れました。

……

「杏ちゃ……ん！」

差し入れ持ってきたよ……！

「『杏ちゃん』はガキっぽいから止めるって何度も言っただよな！？」

私達は私の幼なじみで魔法少女の杏ちゃんこと『佐倉杏子』ちゃんとの待ち合わせ場所である杏ちゃんの家であった『教会』に来ていた。

「たく……お前も変わり者だよな。」

あたしに毎回差し入れてくれんだから。」

「いや、杏ちゃんはほっとくと『万引き』すつからねえ……」

「ほっとけ。」

私の両親が『警察官』（因みにお父さんは最近FFF団を追い掛けたらしい）だからそこら辺も斟酌してもらわないと……

「「！？」」

「……魔女かの？」

ヒデが心配そうな顔で私達を見つめる。

「心配すんなよあたし達がそんな簡単にやられると思うか？」

「ヒデ、大丈夫だよ。」

魔女なんてお掃除してあげるんだから！」

杏ちゃんと私は立ち上がり魔女が入る場所まで突っ走っていった。

……

私達は『薔薇の魔女ゲルトルト』が倒された廃マンションからそんなに遠くない路地裏にきていました。

「ここで合ってるのかの？」

「ああ、『ソウルジェム』が輝いてるからな。」

杏ちゃんがヒデに光り輝いているソウルジェムを見せ言う。

「やっぱり色付きのソウルジェムって良いなあ………魔女を探し当てられるし………」

私は何の反応も無い『透明色』のソウルジェムを揺らし落ち込む。

「何言ってるんだよ凜。」

あんたはあたしが出来ない事……魔女を人間に戻す事が出来るじゃん。

しかも穢れで魔法の威力が落ちねえし。」

落ち込んだ私を杏ちゃんが慰める。

うーん……そうだよね……

「！結界が張られたね。」

「ああ……行くか！」

私と杏ちゃんはソウルジェムを掲げ『変身』する。

服が杏ちゃんは赤色が主体の武舞服に私は白銀色が主体の鎧に変化し手には杏ちゃんが赤い槍を私は水晶を加工したような透明な大剣が出現する。

「さて、ワシもやるかの『試獣召喚』！」
ヒデが召喚獣を召喚し私達はそのまま結界を突き進み始める。

.....

「そろそろ最深部だね。」
私は襲い掛かってきた魔女の手下の『使い魔』の一体を切り伏せそんな事を呟く。

「だな、つーか扉が見えてきたし。」
杏ちゃんが使い魔を突き伏せながらいかにも『私はここにいますよ。』的な巨大な扉を見て言う。

「ふう……お主等の体力は底なしじゃな。」
ヒデが息を吐きながら言う。

「さてと……開けるよ。」
私は扉を押しその奥へと進む。

そこに広がったのは巨大な野原だった。

そしてその中央にはライオンと人間を足して二で割り更に良く解らない数字を足した様なグロテスク外見を持っている生命体『獅子の魔女ライオニル』がいた。
ライオニルの本質は『貪る』奴に囚われた者はどんなものでも食ら

い尽くされる。

「行くよ！ヒデ、杏ちゃん！」

「おうよ！」

それから杏ちゃんは止める！」

「解つたのじゃ使い魔は任せよ！」

私達はヒデは使い魔に向かい杏ちゃんと私はライオニルにむかう。

「はあああああああ！」

ライオニルは巨体に反して動きは速いし巨体通りのパワーを誇るけどその分懐に入られるとその巨体が邪魔で受け身に回らなきゃならないっていう弱点がある。

私は大剣を持つてるとは思えない速さで懐に飛び込み切り立てる。

「おらあ！」

たまらずライオニルが飛び退くけどそこに杏ちゃんが走り込みライオニルのお腹に槍を突き立て更に尻ぎ払いをしお腹の傷を大きくする。

「せえい！」

怯んだ所にヒデの召喚獣が投げ飛ばした使い魔がお腹の傷に直撃しライオニルが完全に態勢を崩す。

「うん！」

これで終わり！『ティロ・ブレイク』！」私は大剣に魔力を最大まで溜め大剣を思いつき振り下ろす。

そしてそれはライオニルを両断し中から出てきた女の子を抱え魔女を倒した特典である『グリーンフィード』を杏ちゃんに投げ渡す。

そして結界が解け私達は変身を解除する。

「はあ……今日も大変だったなあ……」

「じゃのう……」

うつつ……最近魔女の活動が活発になってるなあ……

「ま、お陰で人を沢山救いだせんだから一石二鳥だろ？」

「杏ちゃんは樂觀的過ぎるよ。」

魔女が活発になってるって事は何か起こるかもしれないじゃん。」
本当に杏ちゃんはお気楽だなあ……

「じゃ、じゃあね。」

「おう、じゃあな。」

私達は杏ちゃんと別れそれぞれの帰路についた。

続く

第六話　透明と赤の魔法少女と秀吉（後書き）

如何でしたか？

次回は花梨がマミを救うために変身します。

次回『危機と変身と深緑の魔法少女』

お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6285y/>

バカとまどか マギカと召喚獣

2011年11月23日13時51分発行